雑談における物語の外部評価のモダリティの使用傾向
－日本語母語場面と日中接触場面の比較から－

張　未未

1. はじめに

日常の雑談に、[例1] のような過去の体験を語る「物語」(李2000) がよく生じる。物語に対する語り手の感想や意見を述べる表現は、「評価 (evaluation)」(Labov&Waletsky1967, Labov1972) といわれ、物語の意義が示される (Labov1972:366) という。雑談においては、評価の共有が物語の目的ともされている (Polanyi1985:187)。

[例1] NS5の物語例

1290 NS5　なんか、私も、高校の時さ、ホームステイ行ったんだけど、
1291 NS1　おー。
1292 NS5　その時も、なんか、いっつも赤点ぼっかり取ってる、
1293 NS5　全然できない子なんだけど、
1294 NS1　うん。
1295 NS5　すっごいノリがいい、ノリがいいっていうか、
1296 NS5　テンションは高いのね。
1297 NS1　うん。
1298 NS5　もう、一番馴染んでたもん、向こうの子たちに{笑}。
1299 NS1　で、その点数が悪くても?
1300 NS5　そう。
1301 NS5　もう、ノリでなんとかしちゃう。(1)
1302 NS5　ノリで友達作れちゃうみたいな。(2)
1303 NS5　コミュニケーション能力だね。
1304 NS1　うん。
1305 NS5　やっぱさ、言語を勉強するって、それがすごい大事なんだね。(3)
1306 NS1　そうだね。
1307 NS5　ね。
1308 NS1　あくまでも、ツールでしかないからね。

(注1) 本稿では、日本語記述文法研究会編(2003)に従い、「ちゃう」を文末モダリティから除外した。
(注2) (数字) は、第5章以降の説明に用いられる。

評価には、物語を遮らずに、その進行に即して表される「埋め込み評価 (embedding of evaluation)」([例1] の四角部) と、物語の進行から飛び出して、物語の外側から俯瞰的に示す「外部評価 (external evaluation)」([例1] の下線部) がある (Labov1972:370-375)。物語の終了時に多く現れる外部評価は、語り手と聞き手の相互作用が活発な部分であり (Maynard1989:118)、雑談の流れに大きく関与するとともに、参加者間の人間関係を深める効果がある (Thompson&Hunston2000:6-13) という。つまり、雑談の物語は、外部評価が重要な役割を果たすといえる。

物語に対する思考内容を瞬時に述べることは、日本語の使用に制約のある学習者にとって難易度の高い言語活動である (佐々木2010:38) とされているが、その要因の一つにモダリティの使用があると思われる。物語の外部評価には、文法範疇における話者の心的態度を表す文末モダリティ ([例1] の網掛け部) が多く見られる。日本語教育では、文末モダリティは文型か、文末表現として扱われており、初級レベルから導入されるが、中・上級レベルの場面・話題シラバスの授業にまで浸透しているとはいえないのではないかと思われる。その現状には、具体的な場面におけるモダリティの使用傾向の解

明が発展途上にあるという背景がある。

そこで本稿では、雑談で物語を語る場面に着目し、物語に対する外部評価の文末モダリティの使用傾向を明らかにする。

2. 先行研究

2.1 物語の評価に関する研究

物語の評価は、多角的に[1]捉えられる概念であり、これまで社会言語学・人類学・民族詩学・比較文化論等様々なアプローチによって研究が進められてきたが、幅広い分野で応用されているのが、Labov（1972）の構造分析モデル[2]である（Cortazzi&Jin2000）。

日本語教育の立場からは、このモデルに基づいたモノローグを対象とする研究（Minami2004, 小玉2019等）が多く、その中でも埋め込み評価をめぐる研究の蓄積はあるが、雑談の中で自由に物語る際の評価、とりわけ、外部評価の表現形式に焦点を当てた研究は見当たらない。

物語の評価には、音韻・語彙・統語・談話等、異なる言語構造レベルのものがある（Labov1972）とされており、その全体像を把握するには、様々な分析を重ねて総合的に考察する必要がある（Schiffrin1981:61）。本稿では、モダリティの観点から、その一端を明らかにする。

2.2 モダリティの実証的研究

日本語の文法範疇におけるモダリティの研究は、「陳述論」から出発し、モダリティが命題を包み込むような形で階層構造化される（仁田1989）という立場を受け、その表現形式を網羅的に整理したものとして、日本語記述文法研究会編（2003）がある。近年、この枠組みを用いた、日本語教育のための実証的研究が増えてきており、特に意見文の文末モダリティの使用に着目する一連の研究の展開（伊集院・高橋2004等）に注目が集まっている。

物語の外部評価は、話者の意見が明示されるという点では意見文の主張の部分と同様の性質を持つが、文章とは異なる談話ならではの特徴も有するため、意見文とはモダリティの振る舞い方が異なってくるのではないかと考える。

3. 研究目的

本稿は、日本語母語話者（以下、NSと称する）と中国人日本語学習者（以下、CNSと称する）の雑談における物語の外部評価のモダリティに関わる文末形式を網羅的に分析することを主な目的とする。両者の違いの要因について詳しく述べるためには、更なる考察が必要となるため、今回は使用傾向の分析に留める。

4. 研究方法

4.1 調査資料

本稿で扱う調査資料は、同一のNSによる日本語母語場面（以下、母語場面と称する）と日中接触場面（以下、接触場面と称する）における、各4組約30分（全4時間18分53秒）の親しい友人同士の日本語の雑談全8資料[3]である。調査協力者は、NS計8名（NS1～NS8）、CNS計4名（CNS1～CNS4）の全12名で、全員20代女性である。NS1～NS4は、母語場面と接触場面の両場面の参加者である。CNS1～CNS4は、全員日本滞在歴2～3年の、「日本語能力試験N1」取得の中国語を母語とする上級日本語学習者である。

4.2 調査対象

本稿では、Labov（1972）と李（2000）の定義をもとに、「物語」を「連続する2つ以上の節からなる過去の出来事を再現する語り」と定義する。「物語を開始・終了する合図」や「物語に対する評価」が、「物語」と絡みながら、「物語の話題のまとまり」をなすと見なし、その全体を「物語の話段[4]」と称する。

調査対象は、「物語の話段」に現れる語り手と聞き手による物語の内容の一部または全体に対する外部評価[5]を表す「実質的発話」[6]（杉戸1987）とする。聞き手が共感を示すために語り手と類似する物語を語り合う“story rounds”（Tannen1984:100）という現象も認められており、2つ目以降の物語は、先行する物語の評価として見なすこともできるが、文法範疇ではないため、本稿では研究対象外とした。

4.3 文末モダリティの分類

本稿における文末モダリティの分類は、主に日本語記述文法研究会編（2003）の枠組みを援用して[7]、「1.当為」[8]「2.認識」「3.説明」「4.伝達」の4種に再分類した。

【表1】文末モダリティの分類と用例

分類		用例
1.当為		なくてもいい、べきだ
2.認識	2.1断定	Φ（無標）、だ
	2.2推量	だろう
	2.3蓋然性	かもしれない、にちがいない
	2.4証拠性	ようだ、らしい、（し・する）そうだ、みたいな、という感じ（がする）、という気がする
	★2.5疑問	か（な）、じゃないか（な）
	★2.6思考動詞	思う、考える、感じる
3.説明		のだ、わけだ、ものだ、ことだ
4.伝達		よ、ね、わ、な、よね、でしょ、じゃん、じゃない↑、くない↑、かな、の、もの

（注1）★印部は、日本語記述文法研究会編(2003)の「認識」のモダリティの中で、「その他の形式」の例を参考に新たに追加した分類である。
（注2）網掛け部は、雑談資料の発話例から新たに追加した文末モダリティ表現の例である。

本稿では、物語の外部評価の文末モダリティを、【表1】の分類に沿って、量的分析を行った後、質的に考察していく。その際、外部評価の発話の主節末に出現するモダリティを分析対象とするが、倒置の場合は、前置された部分の節末モダリティのみ分析する。中途終了発話は、分析対象外とした。それにより、全537例の外部評価中、480例（うち母語場面238例、接触場面242例）が分析対象となる。

5. 物語の外部評価における文末モダリティの使用傾向

5.1 文末モダリティの全体的な使用傾向

全480例の外部評価の文末モダリティを調査した結果、複数の文末モダリティの併用があることが分かった。そこで本稿では、場面・参加者別の文末モダリティの分類別の出現率（分類別の文末モダリティの使用数÷該当発話者の外部評価の総数×100）と文末モダリティの使用パターン別の出現率（単独・複合による文末モダリティ[9]の出現数÷該当発話者の外部評価の総数×100）をそれぞれ算出し、その結果を【表2】と【表3】に示す。

【表2】場面・参加者別の文末モダリティの分類別の出現率[10][11]

母語場面	NS1～NS4		NS5～NS8	
1.当為	0	0.00%	1	0.65%
2.認識	63	47.73%	73	47.40%
3.説明	14	10.61%	17	11.04%
4.伝達	55	41.67%	63	40.91%
合計	132	100.00%	154	100.00%
接触場面	NS1～NS4		CNS1～CNS4	
1.当為	2	1.34%	1	0.82%
2.認識	75	50.34%	72	59.02%
3.説明	14	9.40%	2	1.64%
4.伝達	58	38.93%	47	38.52%
合計	149	100.00%	122	100.00%

【表3】場面・参加者別の文末モダリティの使用パターン別の出現率

母語場面	NS1～NS4		NS5～NS8	
Ⅰ.当為のみ	0	0.00%	0	0.00%
Ⅱ.認識のみ	49	43.36%	52	41.60%
Ⅲ.説明のみ	1	0.88%	5	4.00%
Ⅳ.伝達のみ	40	35.40%	41	32.80%
Ⅴ.複合	23	20.35%	27	21.60%
合計	113	100.00%	125	100.00%
接触場面	NS1～NS4		CNS1～CNS4	
Ⅰ.当為のみ	0	0.00%	0	0.00%
Ⅱ.認識のみ	59	46.46%	65	56.52%
Ⅲ.説明のみ	4	3.15%	0	0.00%
Ⅳ.伝達のみ	42	33.07%	40	34.78%
Ⅴ.複合	22	17.32%	10	8.70%
合計	127	100.00%	115	100.00%

【表2】から分かるように、NSもCNSも、「2.認識」＞「4.伝達」＞「3.説明」＞「1.当為」という順にモダリティを用いている。また、【表3】から分かるように、NSもCNSも、「Ⅱ.認識のみ」＞「Ⅳ.伝達のみ」＞「Ⅴ.複合」＞「Ⅲ.説明のみ」＞「Ⅰ.当為のみ」という順に、モダリティのパターンを用いている。CNSは、「Ⅱ.認識のみ」のパターンの使用がNSよりも多いが、何種かのモダリティが複合された形の「Ⅴ.複合」の使用は少ない。

5.2 「1.当為」のモダリティの使用傾向

【表2】と【表3】から、意見文では多用される（伊集院・高橋2004）「1.当為」のモダリティは、物語の外部評価にはほとんど現れないことが分かった。これは、人間関係の構築を主な目的とする雑談では、聞き手を説得するような義務・必要性に関する発言はその場に相応しくないためであると考えられる。

5.3 「2.認識」のモダリティの使用傾向

【表4】は、場面・参加者別の「2.認識」の6種の下位モダリティの出現率（「2.認識」の下位分類別の文末モダリティの使用数÷該当発話者の「2.認識」のモダリティの総数×100）を示す。

【表4】場面・参加者別の「2.認識」の下位文末モダリティの出現率

母語場面	NS1～NS4		NS5～NS8	
2.1断定	37	58.73%	31	42.47%
2.2推量	3	4.76%	3	4.11%
2.3蓋然性	2	3.17%	1	1.37%
2.4証拠性	11	17.46%	19	26.03%
2.5疑問	1	1.59%	1	1.37%
2.6思考動詞	9	14.29%	18	24.66%
合計	63	100.00%	73	100.00%
接触場面	NS1～NS4		CNS1～CNS4	
2.1断定	45	60.00%	53	73.61%
2.2推量	1	1.33%	1	1.39%
2.3蓋然性	1	1.33%	1	1.39%
2.4証拠性	18	24.00%	7	9.72%
2.5疑問	4	5.33%	1	1.39%
2.6思考動詞	6	8.00%	9	12.50%
合計	75	100.00%	72	100.00%

【表4】によると、楊（2014）の調査結果と同様に、CNSは、「2.認識」のモダリティのうち、「2.1断定」の使用がNSよりも多いが、「らしい」、「（し）そうだ」、「みたいだ」、「みたいな」のような「2.4証拠性」のモダリティの使用が特に少ない。

［例2］NS2の物語

761 NS2　聞いたの。
762 NS4　　うん。
763 NS2　日本語とウズベク語となんか違うって。
764 NS2　そしたら、「考えたことなかった」って。
765 NS4　考えたことない人いるんだ。(4)
766 NS4　いるの{笑}？
767 NS2　で、なんか、ウズベク語は、なんか、ダイレクトにものを言うみたいな。
769 NS4　そうなんだ。
770 NS2　日本語は言わない。
771 NS4　Vさんは、そんな、「なんでもないです」って言ってるイメージはない。
772 NS2　ないよね。
773 NS4　　うん。
774 NS4　すごい丁寧だと思う。
775 NS4　考えたこととか、ないのか。
776 NS4　意識がしてないみたいな。(5)
777 NS2　　そう、そう。
778 NS2　意識してないんだって。

［例1］中の（2）と［例2］中の（5）のように、NSは、断定的に評価を示すことを回避するために、「2.4証拠性」のモダリティである「みたいな」を用いて、評価内

容を和らげているのである。これは、意見文（伊集院・高橋2004）[12]では見られない傾向である。

5.4 「3.説明」のモダリティの使用傾向

【表2】と【表3】を合わせて見ると、意見文と同様、NSはCNSよりも、「3.説明」のモダリティの使用が多い。その中でも、「んだね」のように、他のモダリティによって包み込まれた形の使用が多い。

［例3］NS1の物語例

798 NS1　面談したこともあるんだけど、
799 NS5　　うん。
800 NS1　その時に、「あ、それ、母にも言われました」っていう話をしたことがある。
801 NS5　よく似てるよ。
802 NS1　　へえー。
803 NS1　多分、性格とかは、きっと、全然。
804 NS1　なんか、好きなものとか、そういうタイプは // 違うだろうけど。
805 NS5　　ああー。
806 NS1　考え方の、
807 NS5　　うん、うん。
808 NS1　根本は似てるのかも。(6)

［例4］NS7の物語例

370 NS7　でも、そう、紅白で中居君めっちゃソロのとこあってさ、
371 NS3　あ、そう、珍しかったよね。
372 NS7　　うん。
373 NS7　大丈夫?みたいな。
374 NS3　　{笑}。
375 NS3　// 皆思う。
376 NS7　いいのそこ?みたいな感じだった。
377 NS3　　それな。
378 NS7　あ、でもちゃんと歌ってんだって{笑}。
379 NS3　　うーん。
380 NS3　中居さん練習したんだろうなあって思うよね。(7)
381 NS7　　そう。
382 NS7　当ててるん①じゃないん②だって思って。(8)

［例1］中の（3）、［例2］中の（4）、［例3］中の（6）、［例4］中の（7）（8）は、「3.説明」のモダリティが含まれるNSの外部評価の発話例である。（3）（6）（8）は物語の「A.語り手としての評価」で、（4）（7）は「B.聞き手としての評価」であり、そのほとんどが物語の終了時に現れる、物語全体をまとめる評価である。（3）（6）（7）（8）①における「のだ」は、話者が物語と関連付けて自身の意見を提示する機能を果たしている。一方、（4）における「のだ」は、相手の物語の内容を把握したことを示し、（8）②における「のだ」は、先行発話（7）である相手の意見への支持として働く。それらは結果として話し手・聞き手両者の意見を示すため、多様な機能を果たすものであると考える。

このような、NSによる「3.説明」のモダリティが含まれる外部評価全45例のうち、「A.語り手としての評価」が30例（66.67%）で、「B.聞き手としての評価」が15例（33.33%）だった。語り手によるものが多いが、聞き手も物語の参加者として、「3.説明」のモダリティである「のだ」や「わけだ」を用いて、物語と関連づけて自身の意見を明示しているのである。

5.5 「4.伝達」のモダリティの使用傾向

意見文では、NSには見られない、相手に働きかける「4.伝達」のモダリティは、雑談では多用され、CNSとは異なる用法も見られる。【図1】は、場面・参加者別使用数が上位10例の「4.伝達」のモダリティ表現を示す。NSは、評価を述べる際に、CNSよりも聞き手に共感を示す「ね」を多用するが、CNSは、NSよりも聞き手に注意を向けさせようとする伝達態度を表す「よ」を多く用いる。また、CNSに全6例あった、「ね」よりも強い共感求めを示す「よね」は、CNS4にのみ見られた。

6. 複合モダリティの表現

【表3】によると、「Ⅴ.複合」のモダリ

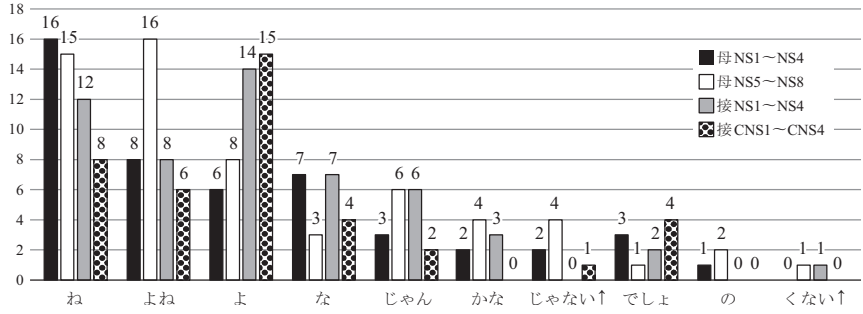

図1　場面・参加者別の「4.伝達」のモダリティおよび出現数

ティは、NSに全72例、CNSに全10例あった。NSは、「～①ん＋②だろう＋③な＋と④思う＋⑤よね」のような最大5種のモダリティを組み合わせて使用するのに対して、CNSは、2種のモダリティを組み合わせたものがほとんどである。【表5】は、NS5 ～ NS8とCNSによる複合モダリティの用例の上位8例を示す。

【表5】複合モダリティの用例

NS5～NS8	例数	CNS1～CNS4	例数
(でしょ／んの) って感じ(だよね／だったの)	5	なと思う	2
んだろう(ね／なって)	2	みたいな感じ	2
んだ(な)と思った(ね)	2	んだと思うの	1
のかな	2	んだよ	1
んだよね	2	そうじゃない↑	1
じゃん、みたいな	2	だろうね	1
だろうね	2	もんね	1
(と／って)思う(のね／よね)	2	ばいいね	1

(注)「／」は、「並立・選択」を示す。

【表5】によれば、NSには用いられるが、CNSにはほとんど用いられない複合モダリティは、引用表現である「って(感じ)」の付加が多いことが目立っている。

[例5]の(9)(10)と[例6]の(11)(12)(13)は、複合モダリティによるの評価の発話例である。そのうち、(9)(10)(12)がNSの発話例で、(11)(13)がCNSの発話例である。(9)(10)(12)のように、NSによる複合モダリティの一番外側に現れる「みたいな」と「って感じ」は、その内部にある話者自身の発話内容を引用する、いわゆる「自己引用」(メイナード1997)の働きを持っている。それは、話者が自身の意見と距離を置くことで、断定回避を図ることである。このように、親しい友人同士との気楽な雑談にもかかわらず、NSは、相手の領域に踏み込まない配慮をしているのである。また、5.4で示

[例5] NS4の物語例

601 NS4　本当必死にやってんのに、
602 NS4　まだ提出日前に、
603 NS4　もう製本しましたみたいな
604 NS8　うん、うん、うん。
605 NS4　投稿するのはどうだろう、みたいな{笑}。(9)
606 NS8　うるせえって感じだよね。(10)
607 NS8　ツイッターかよ{笑}。

[例6] CNS2の物語例

725 CNS2　外がすごい暑いので、
726 NS2　うん、うん、うん。
727 CNS2　で、中にいたパンダが多分エアコンとか{笑}、
728 NS2　{笑}。
729 CNS2　こう、えー、パンダっていいなって思いました。(11)
730 NS2　いい生活してんじゃん、みたいな。(12)
731 CNS2　そう、そう。
732 CNS2　どこ行ってもVIPみたいな感じ。(13)
733 NS2　そうだね。
734 CNS2　そう。

した［例4］における「と思う」によって括られた発話例（7）（8）も、「自己引用」の機能を果たしているといえる。

それに対して、CNSによる評価の発話例（11）における「と思う」は、CNSの体験当時の心情を表すという、本動詞[13]に近い用法になっており、NSと大きな違いが認められる。

7. 無標モダリティの表現

5.3節で言及したように、CNSは、NSよりも「2.1断定」の使用が多い。繋辞である「だ」の使用がNSによる2例しかないことから、CNSは、NSよりも有標モダリティを付加しないことが多いことが分かる。一方、全480例の外部評価の発話の中に、モダリティが無標のものが164例（34.17%）もあり、NSにも多く用いられている。

無標モダリティの評価を、「A.語り手としての評価」と「B.聞き手としての評価」に分け、それぞれ自らの働きかけか、相手の質問への返答かにより、さらに「a.自発」と「b.応答」に分類した結果を【表6】に示す。【表6】によると、NSは語り手でも聞き手でも、自発的に評価をする傾向があるのに対して、CNSは、NSよりも相手の発話に返答するために評価を述べることが多い。これは、［例7］の（14）と［例8］の（15）のように、CNSがNSに質問や確認の形式で評価を求められる傾向があることによるものである。CNSが、NSの発話をオウム返しする形で評価をすることが、有標モダリティを付加しない傾向につながると考えられる。

［例7］CNS1の物語例

102 CNS1 あれ、スーパーで調味料買って、
103 NS1 うん。
104 CNS1 入れるだけで終わり（笑）。
（8発話省略）
113 CNS1 スーパーで売ってるもの。
114 NS1 美味しいの？（14）
115 CNS1 美味しい。[14]（A-b）

［例8］NS3の物語例

639 NS3 なんか、あ、全然気にしないから、いいよって感じだったんだけど、
640 NS3 なんか、あ、こういうところか、もう、全然脈絡がないの。
641 CNS3 へえー？
642 CNS3 あ、うーん。
643 NS3 それは違う？（15）
644 CNS3 うん、確かに、文脈がない、うん。（B-b）

無標モダリティの発話全164例中、「a」が147例と、「b」よりはるかに多かった。そのうち、一語文が63例で、42.86%を占めている。品詞によって一語文を分類した結果、NSもCNSも形容詞が最も多いが、NSは名詞や動詞も多く、CNSにはない副詞もあり、CNSよりもバラエティに富んでいる。［例9］の（16）は、NSによる動詞の例である。NS4は、NS8の物語を受けて、笑いながら「終わってた」と、その場のやり取りをコミカルにしている（Cook2002:161）のである。一方、CNSには、「かっこいい」や「やばい」などの、評価の意味を表す形容詞による一語文が多かった。また、［例1］の（1）と［例10］の

【表6】場面・参加者別の無標モダリティの評価の分類結果

場面・参加者	母NS1～NS4	母NS5～NS8	接NS1～NS4	接CNS1～CNS4	合計
A-a自発	17（ 45.95%）	13（ 44.83%）	25（ 55.55%）	25（ 47.17%）	80（ 48.78%）
A-b応答	0（ 0.00%）	1（ 3.45%）	0（ 0.00%）	6（ 11.32%）	7（ 4.27%）
B-a自発	19（ 51.35%）	14（ 48.28%）	20（ 44.44%）	14（ 26.41%）	67（ 40.85%）
B-b応答	1（ 2.70%）	1（ 3.45%）	0（ 0.00%）	8（ 15.09%）	10（ 6.10%）
合計	37（100.00%）	29（100.00%）	45（100.00%）	53（100.00%）	164（100.00%）

(17)と(18)は、一語文ではないが、(16)と同様の効果を生み出しているといえる。そのほか、[例10]の(17)と[例11]の(19)のような、同一語句の反復による評価の発話が、NSのみ11例あった。モダリティが無標の形容詞基本形反復文は、即応性と能動性が高い発話に現れやすい(大江2019)とされているが、形容詞に限らず、物語の評価における名詞や動詞の反復も、その性格を帯びるといえる。

[例9] NS8の物語例

571 NS8 「OBOG会の案内をいたしますので、こちらのグループにご参加ください」って来てたの。
572 NS8 あー、そうなんだってピーって開いたら、
573 NS8 その日開催みたいな。
574 NS4 終わってた{笑}。[13](16)
575 NS4 あれ?
576 NS4 今日、今日やんの?みたいな。
577 NS4 今日OBOG会なんだ。

[例10] NS8の物語例

38 NS8 残業した分を、お前は休みなつって、
39 NS8 いつ休むのって聞かれたら、
(6発話省略)
46 NS8 明日休日だからさ。
47 NS4 明日休日なんすか?
(7発話省略)
55 NS8 もう、出た、出た、大学院生、曜日感覚。(17)
56 NS4 違う。
57 NS8 曜日に気づかない大学院生。(18)

[例11] NS5の物語例

399 NS5 やっぱ、いなかったから、ここに、うん、うん。
400 NS1 大きい環境変わってるもんね。
401 NS5 変わってるね。
402 NS1 うん、うん。
403 NS5 もう、記憶ないもん。
404 NS5 記憶障害、記憶障害。(19)
405 NS1 {笑}。
406 NS1 記憶はない。

以上のように、無標モダリティの評価は、文法範疇では「断定」の意味(森山2000:25-27)を表すが、語用論的には様々な情意性を表すことが示唆された。より詳細な分析は別稿に譲りたい。

8. 結論

本稿では、日本語母語話者と中国人日本語学習者の雑談における物語の外部評価の文末モダリティを網羅的に整理し、それぞれの使用傾向の全体像を描いた。

その結果、日本語母語話者は、物語に対する評価を雑談の相手と共有する際に、率直に伝えるための無標モダリティの評価から、婉曲に伝えるための複合モダリティの評価までの様々な表現を用いて、自分の感情表出や意見提示にメリハリを付けていることが明らかになった。そのほか、相手に共感を示す「ね」や、意見文でも見られる先行文脈との関連付けを表す「のだ」は、学習者にはほとんど用いられない表現である。

このような使用傾向の違いをもとに、日本語の会話教育の現場では、物語の外部評価の表現別の機能用法を重点的に提示することが求められると考える。ただし、位置別の評価の機能の違いについては更なる検討が必要であるため、今後の課題として進めていきたい。

注

1) Cortazzi&Jin(2000)は、"evaluation in narrative"、"evaluation of narrative"、"evaluation through narrative"という3つの概念を記述している。
2) 完全な物語には、「要旨」、「設定」、「出来事」、「評価」、「結果」、「終結部」という6つの要素が含まれる(Labov1972)。
3) 雑談データの文字化方法は、主に鈴木(2009:70-76)の規則に従った。
4) 「話段」の定義は、佐久間(1987)を参

照されたい。

5)「埋め込み評価」と「外部評価」は、連続線上にある。本稿では、前者としても認められる、出来事の流れの最後に位置する評価をすべて「外部評価」とした。

6) 情報を担う発話を指す。あいづち等の情報を担わない発話は対象外とした。

7)「情報系」と「行為系」からなる「表現類型」の分類は、文の伝達的な機能を示し、その他の分類項目と対応するカテゴリーとして整理されているが、本稿では、物語の「評価」を伝達的な機能と見なしているため、その分類には触れない。また、文体の選択に関わる「丁寧さ」のモダリティは、基本的に参加者の関係によるものであり、評価の内容と直接関わらないため、本稿では分析対象外とした。なお、分類する際に、イントネーションも考慮に入れている。

8) 本稿における物語の「評価」の概念と区別するために、「1.当為」とした。

9) モダリティが単独に使用されるパターンは、【表1】の分類に基づき、「Ⅰ.当為のみ」「Ⅱ.認識のみ」「Ⅲ.説明のみ」「Ⅳ.伝達のみ」の4種に分類した。複数のモダリティを併用したパターンは、「Ⅴ.複合」とした。

10) 1発話に複数の文末モダリティが用いられる場合があるため、各モダリティの合計は外部評価の総数を超えている。

11)【表2・3・4・6】は、小数点以下第3位で四捨五入した。合計は100.00％で統一した。

12) 5.4以降の意見文も、伊集院・高橋(2004)を指す。

13) 思考動詞「思う」には、連続性があるとされる(砂川1988)が、本稿では、すべてモダリティ表現として認める。

14) 評価として認められるのは、評価形容詞である「美味しい」は、モダリティが無標でも、評価そのものを示してしまうためである。

15)「OBOG会はこれからやる」という文脈情報から、この「終わってた」は、NS4による単なる事実の記述ではなく、評価と考えられる。

参照文献

伊集院郁子・高橋圭子(2004)「文末のモダリティに見られる“Writer/Reader visibility”―中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較―」『日本語教育』123 pp.86-95

大江元貴(2019)「形容詞基本形反復文の談話的・統語的特徴」『日本語の研究』15(2) pp.52-68

小玉安恵(2019)「体験談における引用助詞ッテ, ト, 及び無助詞の機能」『社会言語科学』21(2) pp.18-33

佐久間まゆみ(1987)「文段認定の一基準(I) ―提題表現の統括―」『文藝言語研究　言語編』11 pp.89-135

佐々木泰子(2010)「接触場面と母語場面―体験談の終結部から見たその特徴―」『言語文化と日本語教育』39 pp.33-40

杉戸清樹(1987)「発話のうけつぎ」国立国語研究所(編)『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相：座談資料の分析』pp.68-106, 三省堂

鈴木香子(2009)『機能文型に基づく相談の談話の構造分析』早稲田大学出版部

砂川有里子(1988)「引用文の構造と機能1―引用文の3つの類型について―」『文藝言語研究 言語編』13 pp.73-91

仁田義雄（1989）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』くろしお出版
日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版
メイナード・泉子・K（1997）『談話分析の可能性―理論・方法・日本語の表現性―』くろしお出版
森山卓郎（2000）「1 基本叙法と選択関係としてのモダリティ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（著）『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
楊虹（2014）「話し合いにおける不同意表明発話のモダリティ―中日接触場面と中国語・日本語母語場面の比較から―」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』46 pp.87-102
李麗燕（2000）『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究―会話管理の観点から―』くろしお出版
Cook,H. M.（2002）. The Social Meanings of the Japanese Plain Form. In *Akatsuka, N. & Strauss, S. & Comrie, B.*（*Eds.*）*Japanese Korean Linguistics, Vol.101*（pp.50-163）.
Cortazzi. M. & Jin, L.（2000）. Evaluating Evaluation in Narrative. In *Hunston, S. & Thompson, G.*（*eds.*）*Evaluation in text: authorial stance and the construction of discourse*（pp.102-120）. New York: Oxford University Press.
Labov, W. & Waletsky, J.（1967）. Narrative analysis: Oral versions of personal experience. In *J. Helm*（*ed.*）*Essays on the Verbal and Visual Arts*（pp.12-44）.
Labov,W.（1972）. The transformation of experience in narrative syntax. In *Language in the inner city*（pp.354-396）. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
Maynard,S.K.（1989）. Causal Narratives in Conversation. In *Japanese Conversation: self-contextualization through Structure and Interactional Management*（pp.98-133）. Ablex.
Minami,M.（2004）. The development of narrative in second language acquisition: Frog stories. In *Studies in Science, 3*（pp.123-138）.
Polanyi,L.（1985）. Conversational storytelling. In *Teun A. van Dijk.*（*ed.*）*Handbook of Discourse Analysis, Vol.3*（pp.183-201）.
Schiffrin,D.（1981）. Tense Variation in Narrative.In *Language,Vol.57*（*1*）（pp.45-62）.
Tannen,D.（1984）. Narrative Strategies. In *Conversational Style: analyzing talk among friends*（pp.97-129）. Norwood, NJ: Ablex
Thompson, G. & Hunston. S.（2000）. Evaluation: An Introduction. In *Hunston, S. & Thompson, G.*（*eds.*）*Evaluation in text: authorial stance and the construction of discourse*（pp.1-27）. New York: Oxford University Press.

付記

本稿は、2019年1月26日の第148回表現学会東京例会の研究発表に加筆修正したものである。（早稲田大学大学院生）